
けいおん！ ……なのか？

koryuu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ ……なのか？

【Nコード】

N3771BA

【作者名】

koryu

【あらすじ】

一人のビギナーギタリストが、『けいおん！』の世界に飛んでしまう話です。……転生ではありません。

（ない頭で考えたので、もし展開が似ている小説があっても気にしないでください。これは、一応自分のオリジナルですので）

㇏1 廃部！ ……するのか？

ピリリリリッ！ ピリリリリッ！

「ううん……」

俺は、着信音で叩き起こされる。時刻は九時。日曜日の朝だ。

「もしもし……」

『練習やるぞー！』

「……うるさい」

電話から聞こえてきた、やけにハイテンションの女子の声に耳を押さえ、相手に聞こえないよう小声で毒づいた。最悪な目覚めだよ。つたく。

㇏1 廃部！ ……するのか？

『練習場所はいつもの所。早く来いよ。ああ、あと、泊まりだから。じゃな』

電話がきられる。

「いきなりだなあ。じゃ、ギターギター」

俺は優。美旗優だ。ギターを始めて一年も経ってないビギナーだけど、バンドを組んでいたりする普通の少年。

「行ってきましたーす！　って、誰もいねえけど」

ちなみに、父子家庭だったりする。

ヴォン……！　ヴォン……！

「さーて、行きますか」

リュックとギターケースを背負い、エンジンをかける。バイクのではない。もちろん車のでもない。コ○ンのスケボーとスノボーを足したようなやつだ。その名も“エアライダー”。何故“エア”とつくのかは、今説明できない。どういう技術か知らないの。その機能を使ったこともないし。

「イヤッホーウ！」

車道を軽快に走る。ちなみに、歩道での使用は禁じられている。エンジン付きということもあり、バイクと同じ扱いだからだ。当然免許もいる。

「ちえ、混んでるな」

渋滞気味なので、裏道を通ることにする。ここら辺は俺の庭みたいなものだし。最短ルートはすぐ分かる。

「いつもながら揺れがひでえな」

住居地区の細い路地を、最大速度で走ってゆく。人が飛び出したら危ない、と思うだろうが、ここではこうしないと逆に危ない。何故なら――

「ううわああああああああお！」

一気に視界が開けた。そして、浮遊感。――そう、道がないからだ。俺が生まれる前は、まだ住居地区だったらしいが、地震で地盤沈下を起こし、住宅の大半が巻き込まれた。道の整備はしたらしいが、この地区は危険だと認定され、取り壊しすら行われていない。何しろ、地面が宙に浮いてる箇所が結構あり、瓦礫も半分は片付けられていない。スピードを落としての走行だと、絶対瓦礫に着陸してしまうのだ。だから飛び越えるしかない。

「ヒヤッホー！」

そんなこんなで、俺は今空からゆっくり落ちてる最中だ。ここでバランスを崩すと、あっという間に瓦礫に突っ込み、ジ・エンド。だから体重移動に細心の注意を払う。その時にはいつも下を見ているので、異常に気付けなかったのだろう。

「……へ？」

いつの間にか、青に金の粒が混ざったようなトンネルに入り込むという異常に。こんなもの、さっきまで無かったし、無論いつも無い。

「え？　嘘？」

慌てて辺りを見回す。それがいけなかった。トンネルに入ったと

いっても地面は無く、俺自身は空中に浮かんでいたのだ。支えは勿論無い。だから、呆気なくバランスを崩す。

「ぎゃあああああ！」

足が留め金から外れ、ギターとリュックが背から離れ……。

『それは絶対嫌あああ！』

トンネル内でぐるぐる——洗濯機の如く——回りながら、俺は女の子の声を聞いた。……気がした。

——ホワイトアウト。

? side

「4月も後、一週間……」

そう呟くのは、前髪をカチューシャで上げた、活発そうな女の子。彼女の名は、田井中 律。

「誰も来てくれませんね……」

落ち込んでいるような響きの声の主は、金髪で、世間知らずの大人しいお嬢様のような気品を醸し出している、琴吹 紬という女の子。

「バンドも組めずに廃部か」

そんなことを淡々と告げるのは、黒髪が美しい、美人の分類に入る女の子。彼女は、秋山 濤。彼女達は、私立桜ヶ丘高校の一年生で、軽音部に所属していた。……その軽音部は、部員が四月までに入らないと廃部してしまう、崖っぷちの状況にあるのだが。

「それは絶対嫌あああ！」

律の悲痛な叫びが、音楽準備室で虚しく木霊する。

『嘘？』

……誰かの言葉と共に。

「……今の声は……？」

「も、もしかして、ゆゆ、幽霊？」

「ひい！（泣）」

絢が一番最初に気付く。律と濤は、ある可能性を想像したあげく、抱き合って怯えていた。そして。

『ぎゃあああああ！』

「「「きゃあああああああああ！」」」

正体不明の叫び声（悲鳴）で、恐怖心が最高潮に達してしまい、最大音量の悲鳴を上げる三人。同時に腰を抜かしていた。それが良かったのかもしれない。何故なら――

ドダァァンッ！ ……ガターン！

——何かが、ホワイトボード目掛けて飛んできたからだ。横向きに。その何かは、ホワイトボードに激突して床に倒れ、その衝撃でホワイトボードも倒れる。その何かに覆い被さるように。……音楽準備室から逃げたそうとしたなら、間違いなく巻き込まれたであろうタイミングだった。

優side

ドダァァンッ！

「ガッ……！」

俺は、何かに背中から激突した衝撃で意識を取り戻した。そのまま重力に従って落ちる。

（床……？）

それを認識した直後、何かが俺に倒れかかる。

ガターン！

「ぐえっ！」

背中痛みで、どうしても立ち上がれない。だが、どうも瓦礫に突っ込んだ訳ではなさそうだ。ギターケースをいつの間にか抱えて

いたようだが、ダメージ受けてないだろうか……。

「って、ギター！」

慌てて立ち上がり、ギターケースを開ける。

「……良かった。どこも壊れてない」

ギターが無事だったので安堵する。さて、辺りを見渡……

ボスッ！

「むごっ!？」

何かが顔面に当たる。見ると、俺のリュックだった。……その時、俺が気づいていたなら、まだ帰れたのかもしれない。青いトンネルが、徐々にしかし確実に消えていっていたことに。だが俺は、暢気なことに、背中 of 痛みに気を取られていた。

「……あゝ、まだ背中が痛え」

背中 of 痛みを思い出し、さす

ズゴッ！

「……ッ!？」

ろうとしたら、腹に何かが突っ込んだ。悶絶しながらそれを見ると、エアライダーだった。

「だ、大丈夫？」

まだ悶絶してる俺に、誰かが声をかけてきた。そちらを見ると、
同じ年ぐらいの女の子三人。制服ということは……。

「ここはどここの学校ですか……？」

そう質問するのが限界だった。俺はまた意識を失った。

濡side

ホワイトボードにぶつかった若い私服の男性は、ギターを確かめた直後にリュックとスノーボードに激突され、悶絶している。

「何、この状況」

正直、運のない人だと思う。それでも、幽霊ではないことが分かり（不審者だけど）、正気を取り戻した私達は、その男性に近づいた。

「だ、大丈夫？」

恐る恐る声をかけてみる。すると、男性はこちらを向き一言。

「ここはどここの学校ですか……？」

それだけ言うと、気絶してしまった。

「……どうします？」

ムギが訊いてくる。私も、部長である律を見た。

「へ？ 私？」

慌てる律。その時だ。上から何か落ちてきたのは。

「……ピック？」

「……アクセサリー？」

「……ラピスラズリ？」

「「いや、それはないだろ！」」

それは、青に少し金の混じった三角形の物体。ていうかムギ、宝石は流石にないでしょ。見れば男性の頭の上にも同じ物が落ちていた。

「……これからどうする？」

律の言葉で、今の状況を思い出す。

……結局、長椅子に荷物を置いて、後は放置する事になった。校長先生もお呼びした。今の所不審者だし、もし危険人物であれば……なんて事も考えられるからだ。で、校長先生がこちらに来られる数秒前に男性が起きた。

優side

……俺は今、校長室にいる。気がついた直後に連れて行かれたのだ。ここに来る途中、何か記憶に引っかかるような光景を見たのだが、校長先生に学校名を聞いて氷解した。何故か、“けいおん!”の世界にいるのだ。夢か幻か、はたまた奇跡なのか。……だとしたら迷惑だし、原因は分かる。謎のトンネルだ。正三角形の石と同じ色をした。むしろ、この石がトンネルの欠片じゃあるまいか。……訳が分からなくなってきた。

「……というわけです。自分でも何が起きたかサッパリで……」

取りあえず校長先生には、今分かる事を全て話した。この世界が、自分の世界ではアニメとなっていること（コミックにもなっているが）。ここに来る直前までの記憶。謎のトンネル。……話している内に頭がこんがらがったため、校長先生は更に分からなかっただろう。はあ、俺はこれからどうなるのだろうか。

「……分かりました。君は行く当てがあるかね？」

「……行く当て？ いえ、当たり前前に無いですけど……」

「では、当分学校に泊まり込みたまえ。帰れる日が来るまで、この学校に通ってもらおうから」

何、この展開は？

「ここ女子校でしょう!？」

「……その女子校はそろそろ共学に転向する事を考えていてね。私は、男子生徒が居たらどうなるかのシミュレートが出来る。君は勉強する事が出来る。高一なのだろう？ 今後のためにも、勉強する事は大切だ。……どちら也得をするとは思わないかね？」

……こんな問答を繰り返した結果、言いくるめられてしまった。でも、普通はこんなことあり得ないよな？

一日後。制服が出来上がり（校長は本気だったようだ。つか早すぎ）、晴れて俺は、私立桜ヶ丘女子高等学校に入学する事になった。……晴れてじゃねえー！ 俺は一体どうなるの？

全校集会で紹介され、一年三組に編入されてから、好奇心の視線が絶えない。三年生にまで見に来られる始末。唯一逃げれるものが音楽のため、放課後は音楽室に籠もることにした。直前で足を止めることになったが。主人公の平沢 唯が音楽室の前で怯えていたのだ。そして律が、その唯の肩に手を置く。

「……すげえな」

怯えっぷりが半端じゃねえ。

「あ、もしかしてあなたが平沢唯さん？」

「は、はいっ」

「入部希望の！」

「は、はいっ」

律が唯の手を握る。

「いろいろ誤解しててごめん！ ギターがすっごくうまいんだよね！？ 来てくれるの待ってたよー！！」

そのままはしゃぐ律。

「みんなー！！ 入部希望者が来たぞー！！」

唯を連れて部室へと入っていった。

「……やっと音楽室が使える」

音楽室へ入る俺。

「ギターギターっ」と

ギターケースを開けて、俺の相棒を取り出す。ピアノブラックに、二本パールホワイトの細い線が入ったギター。ネックが細く、軽いを選びに選んだ事を今でも覚えている。アンプを探すのに手間取り、やっと見つけたと同時に、“翼をください”が聞こえてきた。

「……」

演奏が終わるまで待つ。それから、“月夜”と名付けたオリジナル曲を、一回だけ弾いた。

律side

「私、この部に入部します!」

その言葉を聞き、私は頬をつねる。漣の。漣も私の頬をつねる。
……痛い。夢じゃない!

「バンザイ!」

廃部じゃなくなる! あ、そうだ。

「ちょっとしつれーい」

漣の鞆から、カメラを取り出す。

「じゃあ、軽音部活動開始記念に」

ムギが移動したのを待ち、カメラを構える。

「あ、私のカメラ」

漣が何か言ってるけど気にしない。

「いっくよーん!」

シャッターをきる。

「あ……でも私全然楽器出来ないし……。あ! マネージャーとか

「どうかな!？」

「いや、運動部じゃないんだし」

つつこむ。ギターは絶対にいる。

「そうだ! この機会にギターを始めてみたらどうかしら？」

ムギ、ナイス!

「で、でも、すごく難しそうな……」

「大丈夫だよ。私達も、分かるところは教えてあげるし」

退路を塞ぐ。

「そうだね。さっきの演奏聞いてたら、私にも出来るかもって思えてきた!」

「……それは良かった」

バカにされてる気が……ん?

「何か聞こえないか？」

少し前からギターの音が聞こえてくる。どうも隣らしい。全員で見に行ってみる。そこには、

「♪」

演奏している男子が居た。よく見たら、昨日の運がない人だ。それにしても、上手い。

「あれ？ あの人、今日入ってきた……」

唯が何か言いかけたところで、演奏が終わった。

優side

「……あれ？」

いつの間にか軽音部の面々が目前にいる。あ、思い出した。

㇏1 廃部！ ……するの？（後書き）

……え、真に申し訳ありませんが。途中で切れちゃってます。

続きは、出来るだけすぐに投稿致しますので。今しばらくお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3771ba/>

けいおん！ ……なのか？

2012年1月9日21時59分発行